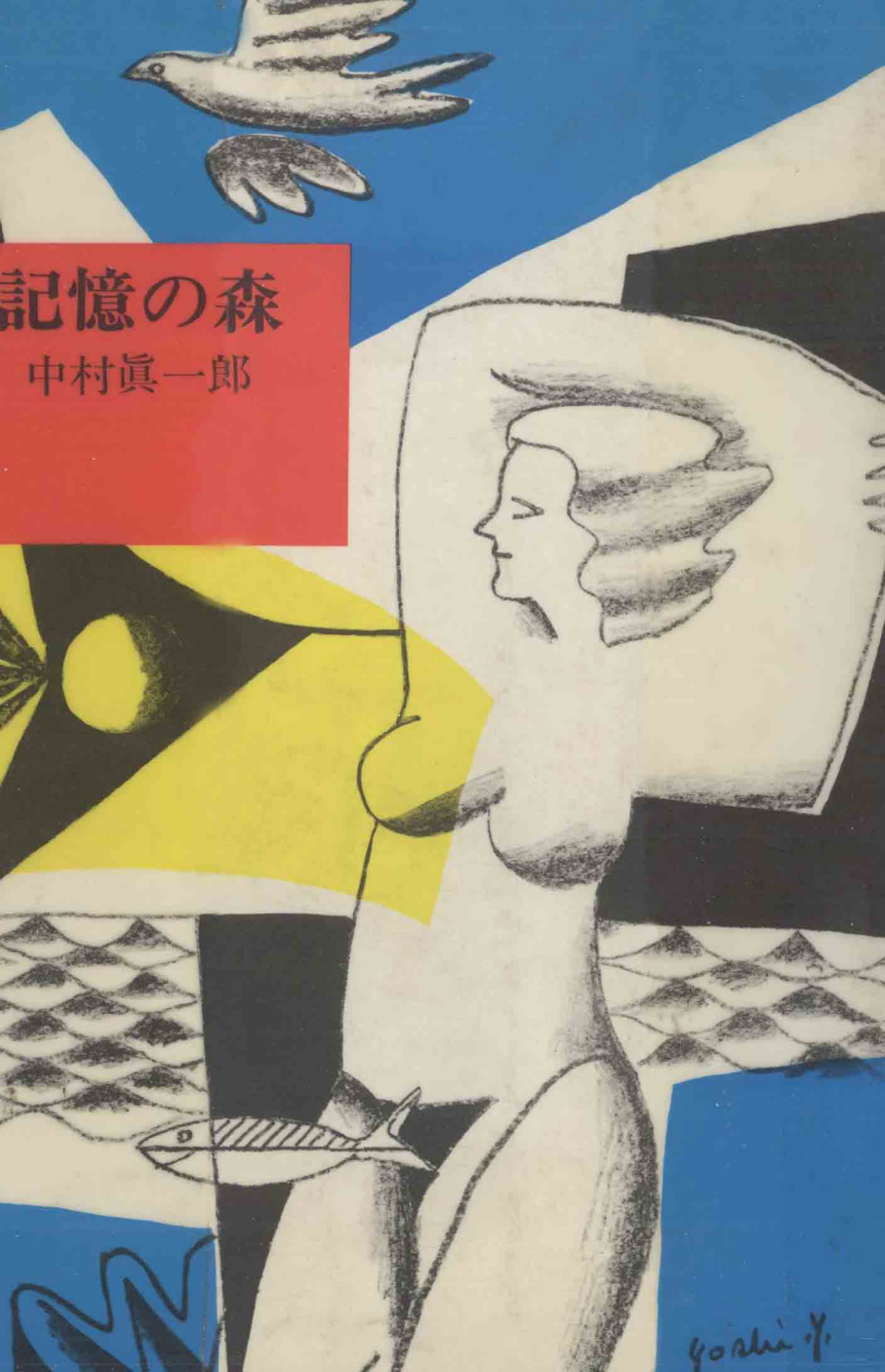
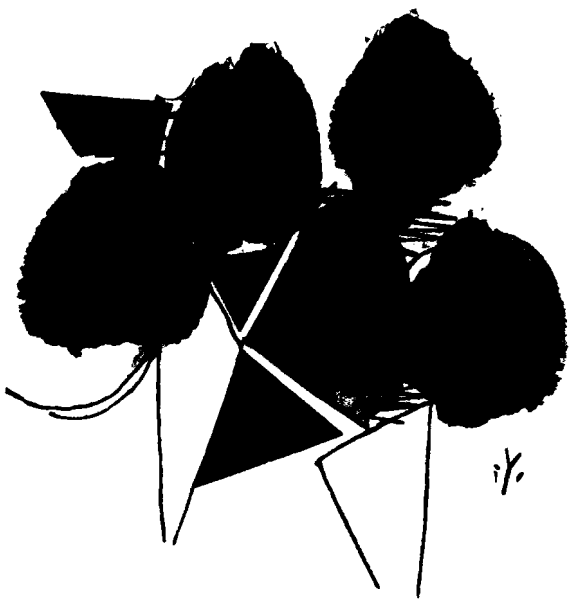
記憶の森

中村眞一郎



記憶の森

中村眞一郎



冬樹社

記憶の森

昭和五十五年一月二十日　第一刷

定価　一六〇〇円

著者　中村眞一郎

発行者　高橋直良

発行所　冬樹社

東京都千代田区神田神保町三ノ二七ノ六
電話代表（二六四）〇三四六
郵便番号一〇一　振替東京八ノ七七五七

印刷所　稲葉印刷株式会社
製本所　株式会社岡本製本所

0095-10327-5190 © Shinichirō Nakamura 1980

記憶の森・目次

まえがき……11

I　室（72年まで）

1　大正の文学……14
2　工芸の世界……16
3　和歌・俳句・詩・散文……19
4　室生文学の新しさ……22
5　詩と小説の間……24
6　高見順をいたむ……26
7　野間宏の使命……28
8　精神的価値としての都市前橋……31
9　クローデルと全体演劇……33
10　世界文学の芭蕉像……36
11　『浜松中納言物語』……37

II　城（73年）

12　プラトンとの出会い……40
13　福永武彦・作品と人……42

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

14 戦後の闇市……44
15 椎名麟三と私……45
16 椎名麟三の未来……49
17 ヘッセ雑感……53
18 無意識の反逆……56
19 結城昌治の横顔……59

Ⅲ 花（74年）

20 新春随想……62
21 心理小説の方法……64
22 小雑誌『審美』の終刊……66
23 平安朝の歌……68
24 戦後文学の党派性……72
25 『ある漢詩集のすすめ』……74
26 堀田善衛の面白い小説……77
27 『中世日本の紀行と修行』……78
28 『黒い運河』……80
29 批評の面白さへの開眼……82

30 福永のこと……85
31 『緑蔭閑談』……89
32 現代小説の混迷……91
33 恋と詩に生きた妖精ルイーズ……94
34 音ぎらい……99
35 私の書斎……102
36 マンデリシュターム復活……103
37 『夜半の寝覚』と現代……105
38 花田清輝の死……110

Ⅳ 島（75年）

39 ネルヴァルと私……114
40 未完の長篇作家……123
41 人生は一つの計画か？……126
42 三島由紀夫の回想……130
43 輪廻の経験……132
44 奇妙な感覚……137
45 旧訳『小公子』……139

46 歴史上の人物……142
47 私の大発見……145
48 前衛としての両性具有者……147
49 即日帰郷……147
50 私の中の日本人・中村加平……151
51 加藤道夫の夢見る情熱……157
52 実現しなかった映画……159

V 風（76年）

53 春と桜と王朝と……162
54 ある瞬間の印象……164
55 『とはずがたり』……167
56 精神的冒険と混乱……169
57 青春と読書……169
58 畏怖をふくんだ憧れ……171
59 過去の意味、あるいは古手紙……172
60 稀有の詩人批評家……175
61 幾とせの夏……178

62 衆道……181
63 古典の現代訳……185
64 風俗の混乱……189
65 ハリウッド製の映画……192
66 ひとつの感慨……193
67 椿の主題による工芸的文明論……194
68 泰淳さんの精神構造……201
69 「あさって会」と泰淳さん……207
70 武田泰淳の思い出……211
71 『日本の古典』への想い……215

Ⅵ 森（77年）

72 ひとつの典型の謎……218
73 幾本もの記憶の流れ……221
74 心理的行きちがい……225
75 記憶の森……229
76 加賀乙彦・人と文学……234
77 『近代文学』と私たち……237

78 精神的価値としての北海道……239
79 中野重治の言葉……243
80 英国小説への回帰……247
81 『小柴垣草子』についての雑感……251
82 能とモダン・ダンスの融合……254
83 連環小説としての開化物……255

Ⅶ 秋（78年）

84 性意識の変化についてなど……260
85 パリと木原……263
86 大岡信あるいは「さかい目のない春」……264
87 文献の処理について……267
88 モデルと記憶……271
89 ゲーテの『親和力』など……275
90 ランボーと日本文学……279
91 忘れられない本……282
92 壮大なる観念の戦慄的なドラマ……285
93 作品の表題……286

94 近況・一九七八年夏……290
95 都会の秋……293
96 顔のない本……296
97 西垣脩の死・ぼくたちの死……299
98 高見・堀井、詩画集に寄せて……301
99 新聞・雑誌・単行本・全集……302
100 ビスコンティと世界のデカダンス……306
あとがき……310

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

記憶の森

装画・吉原澄悦

まえがき——一人の作家の樹木的成長に就いて

これは目次に見られるように、六十年代のはじめの頃から七十年代の終りに近いあたりまでの長い期間に、ひとりの作家である私が、営々として仕事を積みかさねている傍らに、丁度、先を急ぐ旅人が、ふと足をとめて道ばたの草花を摘むようにして、その場その場での感想を偶然にスケッチした短かい文章を、年代順に並べた本である。

この期間は、作家である私にとっては、生涯の収穫期として、最も重要な時期であり、長篇小説としては『雲のゆき来』をはじめとして、『孤独』や『金の魚』、又、『空中庭園』や『死の遍歴』など多方面の仕事を続け、更に私の一生の決算としての四連作『四季』の執筆中だったのである。また私の青年時代からの夢であった江戸漢詩文についての綜合的な評伝書『頼山陽とその時代』を遂に実現した時期にも当っている。

そして生活的には、はじめは神経を病み、後には胸部疾患によって、二度まで死の傍らに歩みより、その後、長い忍耐強い療養を必要とした期間でもあった。

また三度の外遊によって、仕事が中断されたこともある。

そういう内外多事を極めた壮年の日々にあたって、しかしその時々に、私は小閑を愉しんでいたことが、これらの文章から知ることができるのは、当人にとってもひとつの救いであり、喜びなのである。

その上、こうした十数年にわたる長い歳月のあいだの、感想を年代順に辿って行くという仕事は、単なる過去の一時期の旅の記憶の回復というにとどまらず、読者の目のまえにひとりの作家が樹木のように緩やかに成長を遂げて行く、その姿をコマ落しの映画のように現出して見せてくれる筈である。それが私にとっては、この時期のどのような種類の完結した作品とも異なった魅力を持つ本として、これを読者のもとへ送りとどけたい衝動を惹き起こす。私は数多い小説や評論や詩の作者であると同時に、ひとつの時代を一歩ずつ歩んで来た人間なのである。どうか、その足跡を辿り直しながら、左右に展開する風景を愉しんでいただきたい……。

I

室

（72年まで）

1　大正の文学

大正時代の半ばに生れたぼくにとっては、精神生活は漸く昭和の初年のころからはじまった。

だから、大正という時代は、ぼくには幼い時に死に別れた母の微かな記憶と、おぼろに溶け合った、仄明るい過去である。明治はもう、巨人たちの歩きまわっていた伝説の時代、――いいつたえによってだけ自分のものとされている時代であるし、昭和は、ぼく自身の生きた歴史であるが、その間に、このふたつの、全く異った体験の質を、橋のように繋いでいてくれるのが、ぼくにとっての大正である。ぼくは、自分の生年月日を書かされるたびに、この経験と伝説との、ふたつの精神領域を結んでいてくれる大正と云う短い時代について、ある非常に古い想い出に、不意に出会った時のような、暖かい静かな感動を、心のなかに湧き上らせることになる。

この感動は、勿論、その時代を実際に生きた先輩たちにとっては無縁なものであるし、「昭和の子供」である、ぼくらの次の世代の人たちにとっては、明治大正はひとつづきの、死んだ過去に過ぎないのだろう。

が、ぼくにとっては、大正時代というものは、いつになっても、自分の生活と両親の生活とが、分たれがたくまじり合っていた、自己形成の根の、深い端緒の埋められている、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.